

水に立つ

——水上からの都市観察と水辺カルチャーの醸成

Standing on Water: Observing the City
from the Water and Fostering a Waterside Culture

山崎博史 / お話

菅原遼 高道昌志 佐藤布武 岩佐明彦 / 聞き手

植林麻衣 / 文

水の視点での都市の生かし方を常に模索し
実践しつづけてきた山崎博史さん。
現在は水辺荘を主宰し、
SUP (スタンド・アップ・パドルボード) で水上にも立つ山崎さんに、
水上ならではの都市観察の視点と
水辺の新たなカルチャーの育み方についてうかがった。

水の上から都市を見る

——水辺のストリートカルチャー

——山崎さんはこれまで、都市の水辺を舞台としてさまざま
な実践を展開してこられました。まずは水辺に関心をも
たれたきっかけや活動内容についてお話をいただけます
でしょうか。(菅原)

山崎 ゼネコンでホテルや住宅などレジデンス系の設計
をしていたのですが、アーキテクトとして、都市部に豊富
にある水辺といかに関わるかを模索していました。湾
岸の工場や倉庫地帯が急速に超高層住宅やショッピング
モールに変容を遂げていた時代です。何かに突き動かさ
れるように、カメラ片手に運河沿いを一人で歩き、ビル
の裏側や高速道路の下に流れる河川、漁村の面影が残
る船宿街や工場や倉庫群といった港湾風景など、時代
が積層し混沌とした運河や都市河川の状況をワクワクし
ながらリサーチし、自分のなかで「何か」を模索しつづ
けていました。

そんな活動を続けているうちに、E-BOATという10人

乗り組み立て式大型カヌーを通じて出会った人たちのな
かに、同じように都市の水辺空間に興味を抱いている人
もいることを知り、小さなコミュニティが生まれるよう
になったのです。そして、水辺で体験イベントだけでなくそ
の先の何かができたら面白いよね、という話になって。当
時NPO法人地域交流センターに所属していた井出玄一
を中心に仲間4人で「BOAT PEOPLE Association」(以
下、BPA) 1を2004年に立ち上げました。

——すでにその頃から、都市から水辺を見るのではなく、
水の上から都市を見るという視点があったんですね。(菅原)

山崎 水上から都市を見た時の独特のインパクトは、今
でも鮮烈に覚えています。ただ研究者やマニア的趣味と
してではないスタンスで都市に何らかのアクションを起
こしたいと考えていました。「BPA」は、建築やアート、マ
イクロツーリズムなどアクティビティを横断する多様性の
ある組織として水辺のストリートカルチャーをつくってい
ければ、という思いがありました。当初は文献リサーチや
カフェで延々議論を重ねたり、ボートから地上にアクセス
したり係留できそうな場所にどれくらいトイレやコンビニ、



サーフボードに乗り、パドル(楫)1本で水面を漕いで進む水上アクティビティSUP。ボードに立ち水面から都市を眺
めると見慣れたまちの風景が変わってくる。「水辺荘」は日本を代表する産田・横浜の特徴を生かしたまちづくりライフ
スタイルを、水辺から考え、体験することを目的とした市民団体として2012年に発足した

水上から都市を見た時の

独特のインパクトは、

今でも鮮烈に覚えています。

研究者やマニア的趣味とは別の

スタンスで都市にどんなアクションを

起こせるか — 山崎博史さん

飲食店があるのか? 駅からのアクセスは? といった視
点での運河マップをつくるなど、水上からの視点で水辺
のフィールドワークを行っていました。またメンバーの井
出玄一が、2000年から2年間バージ船を転用して芝浦
の運河で水上BARをゲリラでオープンしていましたが、
行政指導で閉鎖せざるを得なかった経緯などもあり、今
後は合法的にアートやコミュニティ活動、水辺という複
雑で不可思議な公共空間を考える場として「水辺のサー
ドプレイス」をつくることも、ミッションの一つとして掲げ
ていました。

こうした活動を通じて、アート系の感度の高い人たちも
興味をもってくれるようになり、2005年には当時BPAメ
ンバーであった坂倉杏介のついで「BankART1929」²か
らお声がけいただき、BankART studio NYKの建物(日
本郵船海岸通倉庫)の前に広がる運河と河岸を利用し
たワークショップを開催することになりました。この時に
バージ船を係留し、水上カフェを併設したサードプレイス
と賑わいをつくるというアイデアが生まれました。そしてそ
のイメージを抛り所に、河岸と運河と大岡川を使ったワー
クショップを展開してみました³。

振り返れば、この水辺マップ作成やワークショップの
時に感じた都市の水辺の問題点が、「BPA」や「水辺荘」
の活動のベースになっているように感じます。この頃は身
近なまちに未開の地や文化が広がっているように見え、メ
ンバー間でも新しいビジョンが次々に発露し熱い議論を
展開していました。

またこのワークショップがきっかけで当時勢いのあった
現代アートの国際展「横浜トリエンナーレ2005」のキュ
レーターであった芹沢高志氏にお声がけいただき、実際



fig.1
「横浜トリエンナーレ2005」にて。3年に1度、横浜で開催される日本を代表する現代アートの国際展で、2001年以来、みなとみらい地区をはじめとする横浜の都心臨海部の施設や屋外広場などを会場とする。舩（バージ船）とは、内陸水路や港湾内で重い貨物を積んで航行する平底の船舶のこと

に中古舩（バージ船）fig.1を購入して山下埠頭で開催された横浜トリエンナーレの会場護岸に舩をコンバージョンした水上ラウンジを係留することができました。複雑な水辺の法規制を問わない「現代アート」としてイベント開催期間の3カ月間限定で実現させることができたのです。

このような週末活動を介して自身にも変化が現れ、脱サラを検討し始めた時期でした。週末だけの趣味として水辺に関わる環境では転勤などもあるし、まちに定着する活動には至らないと考え、大企業での仕事もやりがいを感じていましたが、水辺のカルチャーをつくるなら、水面利用者の生業として関わらないと広がりを得られないし説得力もない、無論定着もしないだろうと思うようになりました。

— 当時の都市部の水辺を、どのようにご覧になっていたのでしょうか。（菅原）

山崎 一見、東京横浜はなんでもあるように思えますが、水上からの視点で見ると面白みのない都市なんです。都市部は極めて水上にアクセスしづらいことがわかります。ロンドンやパリ、アムステルダムでは舩（バージ船）を転用して住宅やカフェ、ホテルなどにしているケースを多く目にします。非合法かもしれませんが、アジアでも盛んに水辺は活用されています。

引き換え東京・横浜は、水辺といえば、工業地帯か

らの再開発で建てられたタワーマンションやショッピングモール、首都高高架下もしくは公園しかない。運河がこれほど近いにもかかわらず、水上利用まで至っていない状況でした。当然ボートカルチャーも少ない。ヨットハーバーにしても海外ではまちの中心部に近いところにつくられています。日本のマリーナは港湾エリアの境界の地とも言えるようなエリアに追いやられているでしょう。船をもっても棧橋に横付けし楽しめるようなカフェやレストランもほとんどありません。この40年で水辺の再開発によるタワーマンションは急増し湾岸運河沿いの人口も急増しましたが、相変わらず眺望や景観以外に生かされていないし生活環境が運河と隔絶されている事実は否めません。

東京や横浜はなんでもあるように 思えますが、水上からの視点で見ると 面白みのない都市なのです

— 山崎博史さん

回遊魚から根魚へ

— カルチャーの拠点としての「水辺荘」

— 「BPA」の活動から、「水辺荘」という拠点を設ける
に至った経緯は、どのようなものだったのでしょうか。（菅原）

山崎 やはり拠点がないと、カルチャーとして定着しづらいと思います。さまざまなアートやまちのプログラムに参加するにしても、その都度予算と機会をもらっているような運営では、都市の水辺をぐるぐる巡る「回遊魚」的な立ち位置となります。アーティストやイベントならそれでもいいのかもしれませんが、活動を自走させコミュニティを定着させるためには、棧橋に近接した日常的に水辺にアクセスできるスペースが必要だと思ったのです。たとえば水上に降りようとすると、ライフジャケットやボートなどさまざまな道具が必要になり、保管のための艇庫や着替える場所がなければなりません。また拠点をつくることで、水辺に関心をもつ人たちが集い、コミュニティや運営人材を育成でき、さらにこれまで水辺に興味なかった市民も関心を寄せるきっかけになるかもしれない。そのようなことを2011年にBankART1929で開催された「これからどうなるヨコハマ」⁴というまちづくりワークショップで知り合った水辺愛溢れる横浜の仲間たちやBPAメンバーであった岩本唯史らと考えていた折、2012年5月に横浜の都市河川にある神奈川県管理の公共棧橋「大岡川桜棧橋」で関東の都市河川では初のSUPの体

験会を開催する機会をいただきました。この企画をきっかけに棧橋の管理を県から委託されている地元の「大岡川川の駅運営委員会」の方たちと縁ができ、合わせて「黄金町エリアマネジメントセンター」が公募していた、大岡川に面した空き物件のレジデンスプログラムに応募し小さな長屋の一角を確保でき、2012年9月、大岡川桜棧橋を拠点とした市民団体として「水辺荘」を立ち上げました。さらに同時期に「アーツ・コミッション・ヨコハマ」の都市文化創造支援助成にも選定されスタートアップ資金を得ることができ、水辺に根ざす「根魚」的活動へと徐々に始動していきました。

— なぜ船ではなくSUPだったのでしょうか。また水辺のカルチャーを発信し、コミュニティをつくっていくうえで、黄金町というエリアにはどのような特性を見出されましたか。（菅原）

山崎 SUPそのものは2000年ごろから湘南で見かけていたのですが、ぼくの記憶では2011年くらいにインフラブルタイプが登場し、徐々に人気を博すようになったと思います。空気で膨らませられ、一人で簡単に組み立てと撤収ができ、持ち運びも楽。ボード1枚とパドル1本というシンプルな機装で水上に出ることができるのです。そして何よりも、水の上で板1枚に人が立ちぶかぶか浮いている様子は、見慣れた水辺の風景を一変させるインパクトがありました。集団でいるとまるで新種の部族のように見え、何か新しいカルチャーが生まれる予感がしてなりません。また、穏やかな天候であれ

ば、子どもからシニアまで、自転車に乗る程度の運動能力で楽しめるのが大きな魅力であり、世界的に広がりを見せている要因だと思います。

そして黄金町というエリアは、戦後の混乱期には売春と麻薬が横行していたエリア。地域住人や行政、警察が手を携えてそれらの業者を追い出し、その空き家を利活用しアートのまちへと生まれ変わらせた歴史をもつまちです。「水辺荘」にリノベーションした空き家も「ちょんの間」と呼ばれる違法風俗店として使われていた長屋の一角です。そのようなまちの再生の歴史があり、アーティストなどクリーンな余所者を受け入れ再生してゆく土壌ができていたのが特徴です。

また、大岡川が県管理の二級河川というところもポイントで、法規制が厳しい港湾局管轄の「運河」に対し、河川のアクティビティには特段規制がないのです（fig.2）。実際はSUPで「河川」から成り行きで港湾「運河」にも出てツアーをしており、2016年くらいに海上保安庁からSUPツアーの年間行事申請を出してほしいと連絡をもらいました。いつの間にか港湾管理サイドからも見た目よりは安全なアクティビティとして存在を認識されていた、ということです。これが「運河」に面した棧橋が拠点だと最初に許可が必要となり活動は難しかったと思います。

— まさに「根魚」として活動が浸透していた、ということなのですね。（菅原）

山崎 今は一般的には暮らしても仕事も水辺から遠のき、水上で生活している人もほぼ絶滅しました。となると、水

fig.2
大岡川にて。まちなかの水辺は風や波の影響を受けにくく、初心者やシニアはもとより子どもや愛犬ともSUPを楽しめる



辺と我々都市生活者をつなぐものは、観光やアクティビティ、コミュニティしか残らないですね。東京は運河沿いの人口密度は高く、防災棧橋も多数あるのでうまく活用できれば、SUPのような水上アクティビティのポテンシャルは高いのではないのでしょうか。

水上からは見える風景も距離感も陸上とはまったく異なります。そのような感覚を得るうちに、まちに対する深い洞察や地域愛が育まれる — 山崎博史さん

水辺を日常に溶け込ませ、使い倒す

— 「水辺荘」は設立から今年で10年を迎えます。都市の水辺のサードプレイスとして、カルチャーを発信しつづけて、どのような手応えを感じていらっしゃいますか。(菅原)

山崎 水辺からの視点は、まちづくりや建築に携わっていない人でも、性別や世代、人種を問わずに広い層が楽しめる、ということが一つあります。たとえば、毎日ランニングや犬の散歩をして見慣れているはずのまちが、水上に出ると新鮮な感覚をもって眺められる。陸を公共交通や自転車などで移動すると水上移動では見える風景も距離感もまったく異なります。そのような感覚を得ると、まちに対する深い洞察が生まれ地域愛が育まれるように思います。

SUPをフィットネスのように生活習慣に取り込んでいる人もいます。観光だと1回の体験で終わってしまう可能性が高いのですが、自宅の近くで繰り返し行うことで習慣になり生活のリズムをつくることできる。早朝にSUPをやるにはリモートワークのほうが適しているから、とりリモートワークメインの会社に転職した強者もいます。このようにSUPを日常的にできる環境をベースにワークスタイルや住む場所を考える人が出始めていることに、カルチャーとしての手応えを実感しています。

早朝SUPなどは単に横浜港に昇る朝日を見てSUPを漕いで戻ってくるだけなのですが、世代も職業も異なる人々が集い、都市の水辺をパドルするという環境を共有し、平和でゆるやかなコミュニティが広がっていくことに生活の豊かさを感じます。また「水辺荘」はホスピタリティ溢れる水辺ローカルガイドの輩出や、地元との関係人口の創出も目的に掲げています。「水辺荘」の会員の大半は自宅から30分以内の近隣からここに通っている方が多く、ぼく自身も含めて徒歩圏の住人は少ないのです

が、地元の神輿や季節のイベント運営や設置にも参加するので、我がまちのような感情を持ちやすいと思います。

もちろん観光コンテンツとしても訴求力があり、旅行者には横浜らしい水上のストリートカルチャーとしてインパクトを感じてもらえるのではないのでしょうか。このように、水辺からのアクションが多方面に広がっていくのが何より楽しいですね。

— SUPは不特定多数を対象にしたメジャー観光コンテンツではありませんが、小さな活動ながらも日常に溶け込むことで水辺の存在が身近になる。そしてSUP体験者は横浜の海に開いた都市デザインを身体全体で享受できる。SUP活動を介して水上から都市を見ることで、まちに対して具体的な発信ができることは非常に興味深いです。(菅原)

山崎 「BPA」のバージ船のようなアート型アイコンは強いインパクトがありましたが、ハードルが高すぎ発信する側と受信する側と、立ち位置に境界ができてしまう感があります。対して水辺荘スタイルのSUP活動はリピーターから水辺荘メンバーになり技術とローカルルールを習得すればいつの間にかホストとして発信者側になっているのが特徴でしょうか。サービスを利用していたゲストが、日常的にSUPで水面利用するうちに、ホスピタリティ溢れる水辺ガイドとなり、水辺の安全や公共リテラシーも向上している。利用者の成長こそがカルチャーを育む原動力であるように思います。

— 山崎さんたちが「BPA」で運河のマップを制作されて20年近くが経ちますが、SUPで水辺にアクセスしやすくなった今なら違うマップが描けそうですね。一方で耐震護岸の整備が進み、アクティビティを弾き返すような水辺も増えています。変化をどのように捉えていらっしゃいますか。(岩佐)

山崎 水上へのアクセシビリティということに関しては、著しい変化はないと感じています。開発事業者側や行政、近隣住人の水辺に対する考えがさほど変わっていないのです。アクセスしようとするればできるのに、事故が起きた場合の責任問題回避からアクセスさせない。SUPは習慣性があり、ワークスタイルや生活リズム、アウトドアフィットネスなど暮らしや風景に溶け込む魅力があり、湾岸運河周辺の人口も多い。観光船でクルーズをするより多方面にインパクトがあると思うのですが。

— SUPがカルチャーとして広まりつつあるなか、依然として水辺へのアクセシビリティは高くなったとは言えない。やはり法的な介入が必要なのではないでしょうか。(高道)

山崎 陸上は歩くことをテーマに魅力を創出するまちづくりができますが、水面は陸上に比べて利用者が圧倒的に少なく、そこまで劇的な変化が期待できない。一部の人が

が趣味や観光、舟運事業として使っている、という域を超えられず、利用者視点で護岸整備に影響を及ぼすには至りません。ただ道路利用とは感覚的に似たものがあり、電動キックボードの出現で道路交通法の規制が緩和されたように、新しい乗り物の影響で公共空間のルールや考え方が変わるのには興味深いことです。SUPは電動キックボードの気楽さに近いものがあり、護岸整備までつなげるのは難しいものの、議論のきっかけになればと、まちや行政への積極的な情報発信は心がけています。

東京の水辺も既存インフラである防災棧橋の利活用のスキームをつくと変わってくると思うのです。ただもちろん既存の水上利用者とのトラブルを防ぐために水面利用ルールの作成は必要でしょう。水上は、雨や風など自然環境の影響を受けやすく、まだまだ利用者も限定されているため、陸上と同じ方法論で議論できないところが、一つのハードルですね。そこが面白いところでもあるのですが。

— 近年、水にまつわる環境が大きく変わってきていますが、「水辺荘」を始めたこの10年間で、変化や気付きがあれば教えてください。(高道)

山崎 環境の変化という意味ではじわじわと水温は上がっているように感じます。年によっては赤潮や青潮が大発生したり、いるべき魚がいなかったり……。ただ10年単位というスパンではそれほど劇的な変化は感じていません。水上にいると水の環境そのものの変化というより、むしろ水辺に超高層が増えた影響のほうが大きいように思います。ビル風が増えてアクティビティに影響を受けたり、冬の日陰が増えたり、人通りが圧倒的に増え、見られることが多くなったということがあります。それによって以前のようなおおらかでのんびりくつろげる水辺ではなくなりつつある現実もあります。

— あらためて、山崎さんが水辺からのアクションを探求している理由をおうかがいできますか。(佐藤)

山崎 魅力的な都市は川や港から派生していますよね。四大文明はどれも大河を中心に都市文明が育まれてきました。漠然とした言い方になりますが、やはり生活者は生理的に水を求めているのだと思います。たいていの人は、水辺で佇んでいたたり水に浮かんでいると心地よさを感じますよね。そんなところから、水辺を都市生活に組み入れることを考えると、まだまだ多くの可能性が秘められていると考えています。

— 「水辺荘」の10年を振り返ると、コミュニティのあり方も示唆に富んでいます。ただ水辺を開けばいいわけではなく、育てる、集まるという時代になっていることを実感します。(菅原)

山崎 聞く以上、聞いた後をリアルにイメージしマネジメントしていかないと続きませんよね。

— 使い倒す、というような話なのかもしれませんね。

(佐藤)

山崎 まさしくそうです。横浜という都市にはさまざまな水辺コンテンツがあるけれども使いきれていない。ランドスケープデザイナーが良かれと思って整えた公園の仕掛けや親水空間も実際には使われていないケースが多々あります。防災棧橋も日常使われておらず、ふだん使っていないものを非常時に使えるとは思えない。日常利用にシフトしていくと都市の水辺コンテンツも豊かになるように思います。そのような、使い倒すという文脈でも利用者コミュニティやカルチャーは重要だと思います。

— 「水辺荘」のこれからのビジョンをどのようにお考えでしょう?(菅原)

山崎 「水辺荘」で2013年からリピーター向けツアーを毎年開催していた利根川水郷茨城県潮来市が、近年水郷のまちづくりに取り組んでおり、SUPも重要なコンテンツとして注目されています。BPAメンバーだった墨屋宏明の紹介で「水辺荘」の活動も参考にさせていただいております。水面利用のリテラシーが向上し、まちづくりや新規事業につながっていくケースが出てくるのは楽しいですね。ぼく自身がハンドリングするというより、やりたい人がいれば伴走しながら支援をしたい、というスタンスです。今後も「水辺荘」がまちのサードプレイス的なコミュニティとして続いてくれればと思っています。

2022年8月17日、オンラインにて

- 1 都市に新しい「水上経験」をつくることをテーマに、アート、建築、都市計画、地域交流などの分野で活動するメンバーにより構成されるメタジャンルなクリエイティブ集団として創設。現在は活動休止
- 2 横浜市が推進する歴史的建造物、倉庫などを文化芸術に活用しながら、まちを再生していく「創造都市構想」のリーディングプロジェクト
- 3 バージ船は係留できず、E-BOATを使ったワークショップを開催
- 4 BankART スクールで開催した研究会。横浜のまちづくりについて市民目線で議論が展開され、2011年に同名の書籍として上梓された

INTERVIEWEE and INTERVIEWERS

山崎博史 | Hiroshi Yamazaki
水辺荘代表理事、合同会社チャートテーブル代表社員、
BOAT PEOPLE Associationメンバー

菅原遼 | Ryo Sugahara
日本大学/全誌編集委員会委員

高道昌志 | Masashi Takamichi
東京大学/全誌編集委員会委員

佐藤布武 | Nobutake Sato
名城大学/全誌編集委員会委員

岩佐相郎 | Akihiko Iwasa
法政大学/全誌編集委員会委員